

Sho  
Fujiwara



「Landscape」1992年 アクリル・ミクストメディア・コラージュ、和紙 69.7×104.3cm

# 藤原祥展

そこではいつもふしぎな風が青い土と  
はなしている

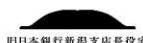
10/10 [金]

11/16 [日]

9 : 00 ~ 21 : 00

休館日 月曜日 (10/13, 11/3は  
開館), 10/14, 11/4  
観覧無料 主催 砂丘館

砂丘館



旧日本銀行新潟支店長役宅  
指定管理者: 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体  
新潟市中央区西大畑町5218-1

同時期開催

藤原祥展

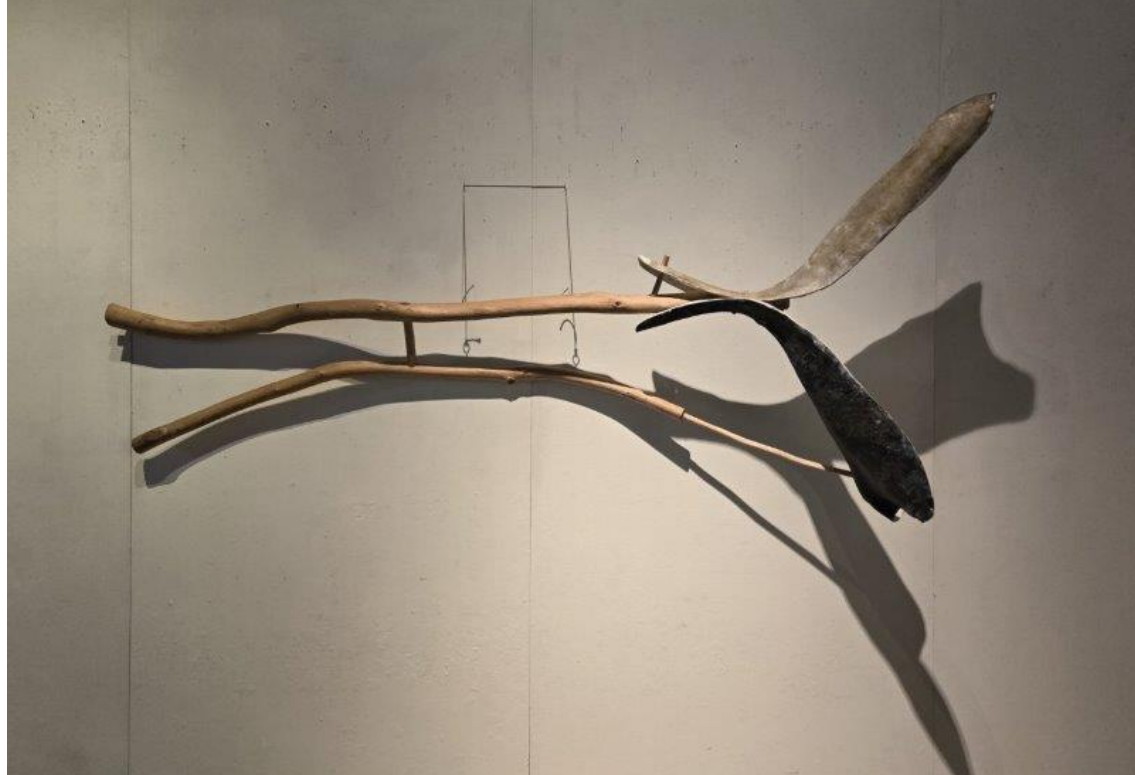
10/17 [金] ~ 30 [木]

11 : 00 ~ 18 : 00 (最終日 ~ 17 : 00)

新潟絵屋

新潟市中央区上大川前通10-1864

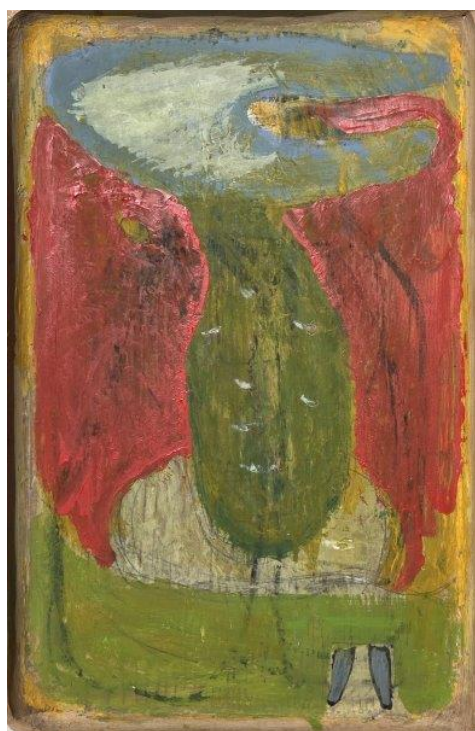




上左「歯欠けの自画像」1973年 サンギース、紙 38.0×55.0cm  
 上右「空を飛ぶ（椰子）」1998年～2025年  
 木材・FRP樹脂・エポキシ樹脂 176.8×73.8×37.2cm  
 下 「サボテンのある静物」 2025年  
 ミクストメディア、木 49.6×31.6m

## 藤原祥（ふじわら しょう）

1950年島根県松江市生まれ。スペイン古典の内面の劇性表現に強く惹かれる。79年サン・フェルナンド国立美術学校（スペイン／マドリッド）卒業。77年タラベラ・デ・ラ・レイナ賞名誉受賞。個展は島根県立博物館、ギャラリーHera（ストックホルム）、ギャラリー睦（千葉）、ニッチギャラリー（東京）等。新潟では新潟絵屋で2007年11月、08年9月、10年5月、12年3月、17年3月に開催。主なグループ展は78年「学生選抜展」（マドリッド・レティーロ公園）、86年「三人展・エロスを描く」ギャラリーちいら（千葉）、97年「植物の見る夢展」夢の島熱帯植物館（東京）、98年「三人展 闇夜の飛翔・太陽への歩行」ギャラリー睦（千葉）、95年～2025年「21+∞展」O美術館、東京都美術館、目黒区美術館区民ホール。



## ギャラリートーク

10/18 [土] 14:00-15:30

藤原祥 + 大倉宏（砂丘館館長）

参加料500円 定員30名

申し込み 砂丘館 Tel.Fax. 025-222-2676

Eメール yoyaku@bz04.plala.or.jp

申し込み開始は9月25日（木）9：00～（メールも）

\*いただいた個人情報はこの催しに関する連絡以外に使用しません。

- 専用駐車場はございません。公共交通機関、または近隣の有料駐車場をご利用下さい。
- 新潟駅からのバス  
 浜浦町線C2系統（バスターミナル9番線）観光循環バス（同18番線）  
 「西大畑坂上」下車徒歩1分



〈私たちは砂丘館を応援しています〉

やぐち株式会社 NSGグループ 新潟ビルサービス 丸屋本店 藤田金屋

株式会社アトリエ・ジャム WIND 郷土の文化に親しむ会 書齋gallery 藤田 隆

藤原祥の展覧会を砂丘館で開きたいと思って、何年がたつだろう。

思い出すのは2008年に喜多村知展を開催したとき、新潟絵屋で藤原の個展があって藤原は砂丘館にその喜多村の展示を見に来た。

いつもつぶやくように、ぼそぼそと話す藤原が、けれど喜多村の絵に心底感じ入って、興奮していることが話して私にも伝わってきた。

喜多村の風景画は、風景が風景でなくなるぎりぎりのところまで絵を疾駆させて、そのさいはて、際から、宝石の輝きを筆先にすくいとってくる。

その輝度に藤原が圧倒され感きわまっているのを感じて、私もなぜだろう、胸があつくなった。

「絵のきびしさ」というものを、いま絵を描く人はあまり意識しなくなったかも知れない。絵がワンノブゼム＝美術の多様な表現のひとつになってきたことも関係しているだろう。

立体も手がけ、どこかのほほんとしたユーモラスな気配をたたえる藤原の創作物は、そんな今風の表現に近似しているようでもある。

けれど同時に、描くことが崖から落ちるか、際でとどまるかという厳しい場所に自らを追い込むことであった時代の感覚を藤原は生きてきたし、いまでも生きている。

どこかふしぎで、面白い絵や立体がけれど呼吸し、一方で向かい合うはげしく、きびしいもの。

そのまれさと貴さを、この展覧会であらためて感じたい。

大倉宏

## 砂丘館

旧日本銀行新潟支店長夜宅

指定管理者：新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体